『ぼくはあと何回、満月を見るだろう』　2023年08月14日

坂本龍一氏は3月28日に、71歳で亡くなった。その後、ユーチューブで坂本氏の音楽を聴き、私はその美しさと優しさに感銘を受け、彼のピアノ曲を聞きながら、ホームページの原稿を書くようになった。亡くなって3ヶ月後の6月に、坂本氏の自伝『ぼくはあと何回、満月を見るだろう』が出版された。闘病中の2022年2月から10月にかけて、編集者鈴木正文氏を相手に、坂本氏が口述した自伝である。2014年に中咽頭ガンを発見し、寛解したが、2020年に直腸ガンに罹り、肝臓やリンパに転移し、更に、肺にまで、転移した。大手術、化学療法と壮絶な闘いをした。その闘病中に、「ぼくはあと何回、満月を見るだろう」と死を見据え、自分史を語っている。私も観た『戦場のメリークリスマス』、『ラストエンペラー』などで、国際的な音楽賞を受賞したことは知っていたが、音楽を通して、世界中の幾多の音楽家、芸術家、思想家と交流を深め、互いを高め合っていく。音楽を創りながら、コンサート、ライブをそれこそ世界中で開催し、聴衆の心を掴んでいる。そして、読書量の多さ、映画は仕事柄観るだろうが、テレビも観るらしく、時間をどのように使っているのかと、感嘆した。とにかく、集中力は並外れている。家族のひとりが、彼は71歳で生涯を終えたが、人の3倍は生きたと言ったそうだが、確かに210年生きたくらいの働きをしている。坂本氏の知性と精神力と活力に圧倒された。私は音楽音痴なので、理解できないことが多くあったが、紙面での制約上、三つのことを短く書きたい。

坂本氏は『音楽は自由にする』を著し、よくこの言葉を使う。「音楽は自由にする」は、ナチスがユダヤ人強制収容所の門に掲げた「労働は自由にする」をもじった表現であると言う。2001年、アメリカ同時多発テロ事件が起こった時、アメリカに付くか、テロリストに付くかという大きな分断が示された。どちらに味方しても武力行使は避けられない状況下、音楽に何ができるかを考えた時、「音楽は自由にする」という言葉が浮かんできた。政治問題に限らず、ガンとの桎梏に囚われてから、音楽を作ったり、聞いたりしていると、痛みも不愉快さも忘れ、音楽は私を自由にする（Music sets me free）思いをしみじみ感じると言う。坂本氏は、嫌いで聞きたくない音楽があるそうだが、年を経て、聞き直してみると、その音楽の良さに気付かされることがしばしばあると書いている。私は、これが自由ではないかと思う。固定観念に囚われず、その観念を変えていく柔らかな感性は人を成長させるのではないかと思うからでからである。

坂本氏はドナルド・トランプが大統領選挙で当選した時、ヒットラーが米国の大統領になったような由々しき事態になったと思った。困難な時代、政治から自立した普遍的な価値を提示する音楽やアートが人々の救いになると、芸術の意味を語っている。私は、経済、損得に関わらない文化的な仕事をする人々に敬意が払われる社会であってほしいと願う。

坂本氏は、社会的な発言をしている。デモに行って、発言もしている。ある脱原発デモで、「言ってみれば、たかが電気です。たかが電気のために、なんで命を危険に晒さなくてはいけないのでしょうか」とスピーチした。「たかが」という言葉を批判され、ガン治療は電気を使うのではないかと揶揄された。坂本氏は、電気の価値を否定したのではなく、人間の命の大切さを訴えたかったと言う。スピーチは「お金より命です。経済より生命。子供を守りましょう。日本の国土を守りましょう」そして、「最後に、フクシマの後に沈黙していることは野蛮だ、というのが、わたしの信条です」と終えている。坂本氏は、反核・反原発、平和憲法、自然・環境保護など、人権と命に係わる問題を積極的に発言している。9条の会では、坂本氏の発言にどれほど勇気を与えられていることか。